



朝鮮通交大紀

三

リ 5
4978
8



Faint red stamp or mark in the top left corner of the left page.

リ 5
4978
8

力邊 5
1.274
3



朝鮮通文大記卷之三 紀カ

長壽院公 再任

一天正六戊子年豊臣朝鮮を伐つ計あり故
公袖谷康廣をして朝鮮にいたりて説て豊臣に
通信あらむを請きたりし事

附

此より先祀天正丙戌年橘康廣國王平
秀吉の書を以て朝鮮にいたると有る事
又同丁亥年九月平首使をして和を求む
有りし事并康廣康光の事何れも愚按有り

一同十七年 萬松院公 公の御使と稱して朝鮮

王城ニ至らきたりし事

附此の時長壽院公の指館を秘して退居

ありしがとく為らきたりしや一彼國終に

其の由を知らざりし事愚按有り

一通信副使金誠一 公に復たふに擬せし書

一有りし事

萬松院公復任

一 天正十七己丑年 公玄蘇を上官とし三つから



副官たり 長壽院公の御使と稱して柳川調信等

一同一朝鮮王城ニ至りし通信使を迎へらきた

りし事

附此の比彼國豊臣宗氏を去りて其同姓の人を

以てうへて島主たらしめらきたりといひしを論せ

し事并此の時

公鳥銃槍刀等の品を朝鮮國に送らきた

りしと言ふ事何とも愚按有り

一此の時通信副使金誠一大内小貳二殿の存亡を

論せし二書有りし事

附以前我州人海西諸殿の圖書船と稱して毎
歳彼の國へ渡りたりしと言ふの事愚按有り

一天正十九年卯年 公玄蘇柳川調信をして
通信使を彼國に護還ありきたりし事

附隱峯野史別録に此時公三つから信使を
護還ありしと言ふを辨るるの事愚按有り

一此年 公釜山に至られこのから朝鮮に諭さる
たりし事

一文禄元壬辰年豊臣小西行長加藤清正以下
諸將をして朝鮮を伐しむ 公をして先鋒

たらしめらるたりし事附清正臨海君順和
君の兩王子を擒にせし事

一同二年豊臣兩王子を朝鮮に還さるし事

附豊臣命して行長の臣小西飛騨州の臣早田四
郎兵衛找して明國に往らしめらるたりし事
一此の比公書を朝鮮慶尚道巡察使洪履

一 祥にいたし、二 兩王子の事を告らまじしにありて
彼國此をきて書に復せしめたりし事
附此の時豊臣兩王子を還さきし事我州の
一 力を用ひらまじし言ふを論せし事
一 愚按有りし事
一 慶長三戊戌年豊臣薨せられしより諸將
兵を捲て我國に還らまじし事
一 文獻云々

朝鮮通文大紀卷之三

第廿一代 長壽院公再任州務二任せらまじし御時

後陽成院御宇関白豊臣秀吉天正十六年戊子
明の萬曆十六年 朝鮮昭敬王廿一年豊臣朝
鮮を伐むとす 公よつて袖谷康廣をして彼國

に諭し関白ニ通信せしむ彼國此を許さる
按ニ攷事撮要此事を記して萬曆十六年戊子
日本國関白平秀吉與通和遣對馬島倭橋

康光來求通信不許と見ゆ康光ハ和毛小康廣
の訛を多しあるむ又懲必録ニ萬曆丙戌間日本
國使橋康廣以其國王平秀吉書來朝廷但報
其書辭以水路迷昧不許遣使と見ゆ萬曆丙戌
ハ我國正親町院天正十四年也此年我州豐臣の
爲めに通信使を求めらる事記録ニ見ゆ又
其の國王平秀吉の書を以て來ると言ふ不審
又隱峯野史別録を考ふるに丁亥春三月
按我々天正十五年明の日本船十六艘自額而外
萬曆十五年あり

洋直到興陽損竹島鹿島萬戸李大源進戰為
賊所圍諸將皆不救大源遂死之其夜賊不知
去向絶無形影蓋平秀吉弒君篡立乘其威勢
欲下取路我國侵犯大明先以沙火同為嚮導遣
若干船嘗我國兵力之強弱也是歲九月平首
遣使求和戊子春按天正十六年明の萬曆平首又
遣對馬島倭橋康光來求和親己丑春按天正
の萬曆十七年也平首又遣使請通信使我國以年々入
寇責之平首即執沙火同及賊倭信三甫羅緊

時要羅望古時羅等遣僧玄蘇平義智等押來
獻之云々と見たり天正十五年九月我國和親
を求むの事又考ふるに

又按德盛錄日本國使橘康廣以其國王平秀
吉書未康廣時年五十餘容貌瑰偉鬚髮半白
所經館驛必舍上室舉止倨傲與平時倭使絕
異人頗怪之及還朝廷但報其書不許遣使康
廣歸報秀吉大怒殺康廣又滅族蓋康廣與其
兄康年自源氏時未朝我國受職名其言頗為

我國地故為秀吉所害云又謬言此是袖谷康
廣の事也

又按西崖集 昭敬王萬曆十九年辛卯陳倭
情奏本曰該本年三月内日本國對馬島太守
宗義調刷還被擄人金大機等該本年六月對
馬島守宗義調所遣伊男義智來到浦口稱有
警急因說日本關白大治兵船將犯大明云々
又此の奏本の内に對馬島主宗義調稱病不主
務下言へり 公天正十六年戊子十二月有て

捐館せらる時、萬曆十九年辛卯公捐館後四年に當り不審しき事也又黃允吉金誠一等萬曆十八年庚寅を以て来り公捐館の後三年也按鶴峯集義智等請遊國分寺使臣成往玄蘇迎坐中堂義智後至乘轎歷階而陞惡其無禮即起出還館嚴責之都船主使人謝之曰副官年少不知禮有此過去非但島主聞之瞿然失色國王若聞此事吾等亦得深笑誠一曰本島臣事我朝與藩臣無異副官又是

島主之子其無禮何敢若是云々と見心又對馬島主復其書見書具審示意多慰使臣經年海外行李無難此實賢主人向國之誠新太守扶護之勤何幸如之第緣主人有疾未獲一面曷勝恨々新太守承是下之意禮待惟謹至以未得送行為恨委差特送之船護涉滄海益見是下事大之敬良慰且荷云々と言ふ此れ又公復其書也右の言ふ所島主を公を指しり也副官又新太守と言ひり

何れも萬松院公を言ふもの也此の事海槎録に詳に見たり
按三萬松院公天正十七年僧云蘇を上官と一公自
から副官たり彼國王城に至らば一時長壽院公の御使
として渡らせらる其後信使黃允吉金誠一我國へ来り一時其の
指館を秘し退居の如して書契贈答杯有し一長壽院公指館の
事彼の國終に識らざりしを以て國王
奏本又右の如く言ひしと見たり

此時金誠一公に復たるに擬せし書有り豊臣路を

朝鮮に借り明國を伐つ事及び特送船の事守

護代郡代圖書の事を載せたり其の書左に記す代按

官郡守各歳遣圖書
船有り一奉海東諸國記に見たり

擬答對馬島主書

見書其審示意多慰使臣經年海外行李無難此
實賢主人向國之誠新太守扶護之勤何幸如之
第緣主人有疾未獲一面曷勝恨恨新太守承是
下之意禮待惟謹至以未得送行為恨委差特送
之船護涉滄海益見是下事大之敬良感且荷但
書中觀縷之事則自有朝廷處置非使臣所與知
也然足下委惠長歲責望於使臣者甚重何敢不
一言以曉之于夫不許特送而廢守令肅拜者此
非近年所為亦非無故裁減而不承權輿也其歲

遠定額俱在_二先王朝約條_一貴島豈無_下文籍之可考
者乎_上至_レ如_二代官_一雖_レ曰_下代太守施_レ法此乃島中權設
之官非_二朝廷所知也_一島主既受_二圖書_一代官又欲_レ受
之則是一島二主也其可_レ守且庚午之變是乃島
人自_レ速_二其辜_一而見_レ絕于大廟也_上足下所謂積惡之
餘殃者不_二其然乎_一今雖年遠人異何可_レ輕壞_レ舊章
以復_中已廢之規乎朝廷之於_二貴島_一亦何厚薄之有
有功則賞_レ之以職而許_二其末朝有罪則鑄_レ其職而
不_レ許_二相通_一此已事之明驗也島中如有_下願復_レ其舊

者足下何不_レ令_下輸忠效勞而聽_中朝廷之指揮乎不
然則是下雖望_二使臣之轉達_一不可得也如何如何
書中又有_二足下所_レ不當請而使臣所_レ不敢聞者犯
大明取_二路南邊_一一事是爾夫南邊我國地方也大
明我朝臣事之國也由我地方而犯_二我臣事之國_一
則是假_二手隣國而身與_レ犯上之事也設有_下徑捷之
路果如是下之所_レ云者朝廷其可_レ開_レ路以嚮_レ導_レ之
乎我國之法除_二釜山一路_一皆以_二賊倭論斷_一如有_二犯
者則邊吏必以_二軍法從事_一此貴島之所_レ明知也而

足下今有云々之請者豈不以下信使既通義為一
家雖犯境行師亦無上所禁故甲即雖上然貴國友邦也
大明君父也今若許上責國便路則是知有友邦而
不知有君父也於人為不祥於德為愆義匹夫且
耻為之况堂堂禮義之邦乎復有下一言可以取譬
者足下試聽之介兩國之間者貴島也足下東事貴
國北順我國畏天事大之敬至矣倘有下賊寇借足
下之路以犯兩國則足下其許之否名為事大而
潛啓賊路則其反覆不信甚矣貴國且不可出借

路之言况足下而敢為此言乎且足下之言曰弊
邦今之時勢至後五百年何敢如此乎隨時勢講
隣友好矣云々亦何意耶兩國和親只在於信義
二字而已強弱非所論也若下不以信義為重而惟
強弱是視則此實市井之交豈大國之義乎今閩
自建國之初首重交隣之義還倭獻馘具禮至勤
故我殿下特遣專使以答其意固非下觀時勢較強
弱而為之向背也足下觀時勢云々者於是乎失
言矣使臣則只以通信為職何敢以此等言轉奏

於朝廷乎足下其思焉
和文
書を見し具に示意を盡し使臣海外年找經るに至つて一
行急あり此實に賢主人我國に順ふの誠及び新太守
扶護の致し處也誠ニ幸と云ふ但主人病有るに仍て未
た一面より其遺恨たるの事新太守能足下の意を承
け謹て禮待し又特送の船を以て使臣を護還せ
しむ仍て益足下大國につかふるの敬を見る但書
中示處の事に至りては使臣の知る處に有らば

且一言して以て答ふ夫特送を減し郡代の朱朝を廢
する此も近年の事に有らん又やふくして古例を用ひざる
に有らん又歲船の定數有る先朝の約定せる處也此事貴島
文書之考ふべきあからむ也守護代に至つては太守二代
法令を施すといふといふと此も島中權不設るの官に
て朝廷の聞とふ所に有らん且島主既不圖書を受代
官又其圖書を受る時は一島ふして二主有る
也可なりとせむや庚午の變是島人このから大國
に絶るもの誠足下のいふや積惡の餘族也今年久

しく其人別ありといふとも如何を輕しく其舊式をやぶり
既ふ廢たるの事を復たするをわが我國の貴島を待た
厚薄二ありあるに有らば功有るは此きを賞するに
職を以てし其来朝を許し罪有るは其職を削り相通
する事を許さる島中の人舊が如くあらむ事を願ふ
者あらば是下宜しく其を以て忠を以たりし勞を
盡し以て朝廷の指揮を待たしむべきの事又是
下の言ふべからざる處よりして使臣の以て啓聞は
からざるもの有大明を犯し路を我の南邊に借ら

むと言ふもの此き也夫南邊は我の國の地にして大明の
我の臣とすつかふるの國也隣國をして我の地に由り我の臣と
すつかふる國を犯さしむ是手を隣國に假てすつかふる其上を犯
はに預る也たは便路の近き是下のいふ處の如くあらむ
むとも朝廷其路を借し以て是を導すべしむ也且我の國の
法釜山の路を除くの外海賊を以て是を論じむ他路
を犯す事有る時は邊吏必軍法を以て是に處は是責
島の明々に知せる處也然も是下今如此言ふもの信
使既に通し義一家に同じきを以て其境を犯し

師を行るといふは又是を禁むる所ありと云ふ然りと
へと貴國の朋友の國也大明の君父也若貴國に便路を
借さる是朋友有る事を知りて君父有るを知らざる也匹夫
をら此をを耻の況や禮義の邦においておや且一言の
譬ふべき有今兩國の間に居るものも貴島也是
下東貴國に一つ一北の方我々國に順ふ若し寇賊
有つて路を貴島に借り以て兩國を犯さむといふ是
下教りして此に路を借さるや此を貴國といふ
と上路を借るの詞を發はるからん況や是下に有つて

おや又是下の言に弊邦今日の時勢能後五百年の久
しきに至つて如此くならむや姑く時勢に随ひ隣
交をいたはつと夫當國の好に但信義の二字に在る
の信義を以て重しとせば只強弱を以ていふは此を市
道の交にして大國の義にあらず今関白始て國を
立つ隣交を重し虜を還し賊首皆獻は其禮至
て厚し故一を以て我々國專信使を通るの其時
勢を見強弱をたくらべ此をを為にあらは是是
下言を失つ且使臣に有つて但通信を以て職と

在るのこゝろてり如此の行身カの言を以て是を朝廷に
轉奏をへけむ是下此見を思へり
第二十二代 萬松院公再ハ州守に任し改て
義智と諱し從四位侍從對馬守と稱し御時後陽
成院御宇同しキ開白天正十七年己丑豐臣終に
朝鮮を代むとて 公爰ハおいて僧玄蘇をハ官に
之つから副官たり 柳川權之助調信等と朝鮮王城
より久しく東平館に留り通信の事を議せられたり
に其比彼國の邊民沙乙背同 按ニ宗氏家
譜ニ據る 叛ひて我

國に入り海賊を嚮導せしより彼者其叛民を捕へ又海
賊を送り其後通信を議るへしとてハハハ公調
信を我國に歸し沙乙背同及賊倭を捕へ且俘虜
を送り標心ハを盡されしに仍て彼國漸く翌十八年
庚寅三月に至りて命知黃允吉司成金誠一を上
副とし典籍許箴を書狀官とし通信使を渡せし
あり

按ニ攷事撮要此事を記して萬曆十七年己丑全羅
道海邊居人沙火同 按ニ德事野史別錄等ハ書何ぞと沙
火同と有、德監録宗氏家譜同しく沙

乙背同七
見一左
漂入到日本五島誘引島倭來寇我邊歲
為邊患及秀吉請通信使我國以連年入寇責之
秀吉即令五島捕得沙火同及同謀賊倭等仍遣
僧玄蘇對馬島主平義智等押來獻俘且刷還舊
歲被虜人孔太元等八十餘名遣通信使黃元吉
全誠一等回答于日本仍探賊中情形見一左
又隱峯野史別錄云秀吉己丑春平酋又遣使
請通信使我國以二年々入寇責之平酋即執沙火
同及賊倭三甫羅緊時要羅望古時羅等遣僧

玄蘇平義智等押來獻之曰前日侵犯皆此輩所
為非我所知且刷還舊歲被虜人孔太元等百餘
人誑誘我國於是朝廷動色相賀以為南邊自此
無憂議遣通信使上命二品以上議可否以黃元
吉為上使全誠一為副使許箴為書狀官回謝越
明年庚寅春黃元吉全誠一許箴等自釜山越海
三月而入日本國都入都五月而始見平酋傳國
書也四日而出都二十日而答書至一一
又按懲毖錄日本國使平義智來義智者其國

主兵大将平行長

按小西攝津守平行長也女
公嘗娶其女為夫人

塔也為秀吉腹心對馬島太守宗盛長世守馬

島服事我國時秀吉去宗氏使義智代主島務

以我國不諳海島為辭拒通信詐言義智乃島

主子熟海路與之偕行便欲使我無辭以拒又

窺覘我虛實云々と見たり國王奏本又此の

説有り全誠一許書狀與一書

按海槎録
二見たり

新王又易島主の語有り又趙重峯の集に宗

氏の遺臣論其の文有り何きと此の惑有り

のち長壽院公に至る迄何きと對馬州太守宗

諱を以て書せらるるに公に至り始めて對馬

州太守平諱と稱せりきを以て彼國おとらる

平秀吉前之島主宗氏を去りて其同姓の人

を用ひ新たに島主を易一置たりしとせしむ

考として左に記す

按俗傳ふ以前我州の人海西諸殿の圖書船と

稱し毎歲彼國へ渡りしといふ事有り但此書の

いふに據り及後載る處方長老の記に據る

此事何りに似たり不審しき事也

與對馬島主上副官書

按此所謂上官是
玄蘇副調信也

某白上副官對馬島主三足下兩國講和作為一
家故我朝於貴國諸殿亦許其修聘信使往來殆
將二百年于茲矣惟其滄海限隔聲聞莫接其存
其沒但莫聞知故一番接待之後則雖累百年未
嘗廢絕此三足下之所曾知也今茲使信之來也
我殿下念交隣之義推恩數於諸殿有若京極細
川等六殿處皆有禮物矣及到貴國則右等諸殿

無一人存者聞白殿下以信義為重不_下以我國之
不知為可悔乃能處置得宜留禮物以俟代職者
而具載曲折于國書中俾使臣得免委命於草莽
其處事明白實非常情之所可冀及也嗚呼闕白
殿下之盛意既如此使臣何敢不盡言於此月以
貽疑阻之端乎三足下其亮之夫周防大内西海之
小二殿亦通聘于我國而最親且舊者也去夏使
臣之過也業已致賜物矣雖使臣留貴國且一
年亦豈無聞見乎在都之日諸僧皆言二殿亡滅

已久今到赤闕則寺僧及村老皆曰大內殿義隆
四十年前為毛利殿所殺子孫亦皆夷滅今主周
防長門石見等七州者毛利之孫是按釋字元
也至如小二殿則得罪於闕白其亡亦有年代守
其土者乃小早川隆景也云々本月初六日到藍
島則島倭之言亦與赤闕所聞無異也夫京僧皆
知文字識古今者也其言必不妄也况赤闕乃大
內之管內也藍島亦小二之地也寧有不知之理
乎以是觀之二殿之亡亦如京極細川等殿萬々

無疑也然於使臣之贈禮物也三足下不為之直
言者何哉噫三足下之心豈庸衆人之所能測哉
彼京極諸殿之亡三足下非不知之也一國命令
制在闕白未稟闕白之前三足下何敢以國內事
情透漏於他邦乎惟其若是故當初禮曹之作書
契使臣之傳禮物也三足下終不敢吐實此固理
勢之所必至豈三足下有意於欺隣國而如此哉
此使臣所以怒足下之不言而益多其臨事慎密
者也今則闕白殿下昭示大信已將諸殿存之洞

然別白而言之矣惟茲二殿之存亡三足下更何
所難而不言之乎前之不言者以無闕白之命也
今之可言者以有闕白之令也前後語默雖殊皆
合於時宜亦何害義之有嗚呼使臣既明知二殿
之亡矣雖親見二殿之面猶不能無疑况過境之
際所謂二殿者未嘗馳一介之使以假中境上雖或
使人于堦濱二殿之書乃一筆所寫也二殿總統
方面豈無寫手而借書於堦濱乎此必無之事也
是下於是而不言則始為害義失信而不免欺隣

國之為上矣如何如何且我朝通好於貴國者豈有
新舊之異夫廢興存亡有國有家者之常今者毛
利殿小早川既有二殿之出如欲代二殿而繼上好
則從實輸款以聽我朝之命可也何必鑿々自欺
以假敗亡者之名號乎念惟三足下皆以闕白殿
下之心為心者也必不以使臣之言為非也使臣
亦奉命于我朝以通信為職何敢闕默受偽書以
誑我殿下乎此事理之至明且著者也三足下其
垂察焉

和文

兩國の好むを以て我々朝貴國の諸殿に至るまで其の
修聘を許し信使を通るもの今既に二百年但海路
の隔たを其存亡聞き知る處あり爰を以て其一たび
接待を許しをハ百年を累ぬといへとも終に是を廢
した仍て今使臣の來る京極細川等六殿の處皆贈る所
の禮物有り貴國に至るに及て始て聞く右諸殿今一
人の存在無しと関白殿下能く此きに處置し姑く
其禮物を留め其職に代るの人有るを待て此きを授け

しむ且其曲折此きを圖書の内に載に其事に處するの
明白ある實不常情の及ぶ所にあらず今其疑ふべき
者をおけて盡し此きを三足下達凡夫周防の大内西
海の小二聘を我國に通る尤親しく且久し去夏使臣
の至る既に此きを賜物をいたしたり然も今に至て未だ
一言の我に答ふるもの有らば都々有るの時此きを諸
僧に問ふに皆いふ二殿の亡る既に久しと今赤間關に
至て聞く大内殿義隆四十年前毛利殿の爲に殺さる其
子孫皆滅して今周防長門石見等の七州に主たるものた

毛利の孫輝元也又小二殿に至てを罪を関白に得て其
亡る事既に久し
按ニ西園太平記ニ小二殿大内リ為に滅せらる大内又
其逆臣陶尾張守三越せらるて亡びたり其後毛利元
就陶氏を伐て亡せり誠一未だ
此事を詳ニせざりしあり今其土を守るもの小早川隆景
也と本月六日藍島に至り其間く處又赤間ニ有つて
間に異ある事あり夫京僧皆文字を知り古今を識るし
の也其いふ處必に妄あらし且赤間ハ大内の管内にし
て藍島ハ小二の地也其管下の人として是を知らざる
の理あらむや此も二殿の亡る又京極細川等の殿の
如くある萬々疑あり使臣の禮物を送るにあたりて

むを三足下實にふつて是を告げざる思ふは彼の京極諸殿
の亡る三足下是を知らざるニあるは但関白の命あるを以
て國內の事情敢て他邦に漏らす事欲せざるを以て
初禮曹其諸殿に送るの書契を造後使臣禮物を
傳ふ當りて三足下始終其實を告さるあり夫隣國を欺
くに意あつて然りといふんや然し今にあたりてハ関白殿
下既に明らかに告るに諸殿の存亡を以て在る時ハ三足下
亦有つて又何の言かたき處有りとするやと既ニ明りに二殿
の亡るを知る時ハたとひ親しく二殿の面を見るといふと

かを疑ひなき事あたはば又其境を過るの時二殿有つて
一价を馳て此きを境上に候せば後堺濱ニあつて初て人
を使すと云ふと二殿の書契を見るに同一く一手の書
有るもの也夫二殿の貴を以て此きり書手去くして手
を堺濱の人ニ借り玉也此れ決して無きの理也且廢
興存亡の國をたふ古家をたふの常也今毛利殿小
早川既ニ二殿の地をたもつて又二殿の好を我國に通
たふる如くあらむ事を求め宜しく其實を以て明らか
に我ニ告ぐ一き此れ如何を既に亡るもの、名跡を借

玉ふとを用いむ也今使臣命を我朝に承り通信を以て
職とに敢へて黙して其偽書を受け歸て我り殿下を
欺くべしむや此を誠に事理の明らかるものもおもふに
三尺下此きを察せし

擬重答上副官對馬島主書

昨承_レ愈復書具志ニ殿曲折得_レ以祛疑惑之胸良
荷良荷細讀_レ来書疑惑滋甚雖_レ欲_レ無_レ言得手三尺
下更加_レ察焉来書所謂奉_レ使外國者獨_レ諳_レ國事其
他則不能_レ者似_レ笑然使臣留_レ京都五閱月矣京僧

之道古今諳國事如上官者可車斗量載也貴國
事情雖不敢出口至如二殿存亡則無闕利害故
人人皆能言之使信何能記誰某也夫輝元之代
大內隆景之代小二則謹聞命矣然足下以為輝
元隆景二殿之同姓也輝元則食邑毛利隆景則
移居小早川故人以是稱之云々此則不敢聞命
也蓋大內之姓多太良也小二之姓源氏也兩家
世為寇讐卒戰不息此異國之所明知也今毛利
之姓則使臣雖不及聞然小早川實輝元同姓叔

父也果與源氏之小二為同姓乎此一疑也大內
小二乃諸殿之大者也撫有山陽西海之地傳世
既久在人耳目今果有之則貴國童稚無不知之
况識字之京僧管內之蓋島赤關乎雜曰輝元食
邑毛利隆景移居早川按小字脫亦豈肯舍二殿之顯
名稱縣邑之微號乎此可疑者二也上年使臣之
過一歧也請令二殿使者受書幣于赤關則三足
下既許之矣使槎若小留則豈不能面傳乎三足
下托以闕白促行匆匆過去使臣初以為然一聽

指揮矣然于時關白殿下方在東征同無從行之
理而所云若此此可疑者三也鄙書所謂過境之
時不馳一介之使者非敢歸責於三足下蓋初則
許二殿之來受到赤關則曾不暫留二殿雖欲馳
久候問得乎且今島主之先出也二殿既知使臣
之還期矣獨不可留書境上傳付使臣乎附書島
主而於使臣則不墮一字之問此何意耶臘月二
十一日過備後境也有官船過去舟楫甚盛問之
則乃毛利殿朝京者云在京寺時小早川隆景來

見至請觀射聽樂又請額字而去問諸寺僧則乃
是都督侍從守豐銃二州者也毛利按早川若
果為二殿而受書幣則寧有相值而不相問相見
而不相謝之理哉此可疑者四也倭俗雖不知中
華之字如本島及環瀆等處亦有解漢字通書契
者豈以二殿地方獨無識字者乎若果無之則今
書契誰所書耶噫受隣國書幣莫重者也而無印
信無圖書投借書於千里之外欲人之相信得乎
此可疑者五也凡此五疑者雖使三足下易地而

思能無可疑乎當初禮曹之作書契也譯官既言
于三足下矣若知諸殿存亡則其時雖未攻言可
向使臣道之也然而三足下不能者豈不以未稟
于闕白之故耶此使臣所以不言為恨而益
嘆其臨事慎密者也今則闕白殿下處事明正若
此何獨於二殿虛而為實無而為有乎三足下大
槩吐實而不敢盡言者將稟闕白之命而為之善
處也豈有他哉今使臣之受書契以去者可欲歸
報朝廷而取進上也亦豈以二殿為尚存耶孟子

曰不直則道不見使臣之意亦猶是也願毋下以觸
講為可罪一以闕白殿下之盛意為心則彼此無
疑阻之弊貴國信義益暴於隣國矣不亦美乎三
足下以為何如亮之不宣

和文

昨復書を受て疑惑益甚一來書のいふ如く使を
外國に奉る者其國の外知及ふ事不能といふ誠に
教ゆる處の如し但使臣貴邦に留る事既に五月にして
京僧の古今に通し國事を諳る上官の如き斗に

量り車に載せ一貴國の事情の如きは敢ていふは
いと二殿の存亡に至て利害に預る者無きを以て人々
能く此きを言ふ輝元の大内に代り隆景の小二に代るハ
示在處を審にせり但輝元隆景同姓にして輝元ハ邑を
毛利ハ食之隆景を移て小早川ニ居るハ故ニ人此きを
稱はと云ふ者ハまだ諭さる處也夫大内の姓を多々良
して小二の姓を源氏也兩家世々讐敵たり争戦して
息に是異國の明々に知る處あり今毛利の姓使臣ハまた
聞に及らんといふ小早川ハ實ニ疑ふべき者一ツ也且大

内小二ハ諸殿の大はなる者也山陽西海の地をたまた世を
傳ふる事既に久し今果してとむむと童稚も又此きを
知らむハとんや字を識るの京僧管内の藍島赤間おや輝
元を邑を毛利ハ食之隆景ハ移りて小早川ニ居るといふ
といへとも敢て二殿の大跡を捨て縣邑の微名を稱せむ
や疑ふべきの二ツ也去年使臣の壹岐ニ有る時二殿を
して使を赤間にいたし我ハ書幣を受けしめんと言ふ
時ハ三足下既に此きを約せり其赤間ニ至るに及びて三
足下關白其行を促さしむるといふに托し忙しく過

き去らしめ西面カのあたり書幣を二殿に傳ふる事を得さら
しむ時関白殿下まきに東國を征た夫使臣の行を促うさ
しむるの理あらむや然し三足下のいふとあかしのま
疑ふべきの三ツ也前書に其境を過るの責を三足下
に歸せよにあらん但初二殿其使をして来りて書幣を
受しむる事を約し赤間に至るに及びて又我々行を促り
して過き去らしむたとひ二殿其使を馳せむと欲と言ふと
も得へけむや且を島主の先達て發する使臣國ニ歸るの
事二殿此きを聞けといふと有らんや此き宜しく其

使を境上にあたりて以て答書を使臣ニ傳ふべくして却て
此きを島主に謝し且使臣ふおいて又一字の間慰をい
たはすの無きを何そや臘月廿一日備の境を過る時官
船有つて過き去り此きを問ふに毛利殿京に朝来る也と
言ふ京寺に在るの時小早川隆景来りまみ一射を觀樂を
聞願字を求めて去る此きを寺僧ニ問ふにいまカ都督
侍從豊筑二州の主也と毛利小早川果して二殿に
して既に我々書幣を受しめをいけんを相見て此
き謝をいたさるヤシカの理あらむ疑ふべきの四ツ也倭

俗中華の文學を識うたといへとい日本島及び堺濱等
の所又漢字を識るもの有り獨り二殿の地方漢字を識
人ありらむ也若し漢字を識るものふからしめたる今
此各書又誰人の書きたるものとあらむ也夫書幣を隣國に交
する事乃至て重きもの也今其各書を見るに既に手
を人に借るの書にして又圖書の押^押はるあり此書を千里
の外に投し人をして其果して復書たるを信し疑はば
さらしめん事を欲は疑ふべきの五つあり此の五つの疑
へき姑く三足下して我々に代り以て思ひしむとら

能く疑ふ處かからむ也且初め禮曹書契を造るの時
譯官をして諸殿の書を三足下二告しむ時其存亡い
また此書をいふに及^たるも其後宜しく此書を使臣に
告ぐべし然し終に此書をいふもの未だ関白殿下の
命を受さるを以て也今関白殿下既に明くに諭せり然し
三足下尚其大槩をいひて敢て盡く告げざるもの
何そ也今使臣明くに二殿の亡ひたるを知て尚其書契
を受て以て去るもの歸て此書を朝廷に報し其處置
を待たむと在るものふを二殿を以て亡ひんとせむ也

願を三足下幸に關白殿下の盛意を以其心とせむ事
城

按金誠一ノ二書のいふもの不審しき事也又按
方長老の記に昔者日本禁中及公方管領諸
官宰臣之使直遣之至於中古日本使依之人
跡彼國之禮儀肅拜宴享之間為相身有玷和
好故憑仗對馬主遣劄符銅印令島人作使官
起海調所用然每歲從公方家使者下島必董
其交誼受其所受之物其後畠山氏兄弟諍亂

日本諸方通使相絶對馬幸其銅印一私遣使船
受接待致所務多年云云此き據るに俗の傳ふ
る處以前我州人諸殿の圖書船と稱し毎年朝鮮へ
渡りしといふ事其の據り處あきにあらん但此の比
諸方の使通せざりしを幸也といふ其の銅印を
用ひ使と稱して彼國へ至り其の接待を受け所
務を私せしといふは、しき事也

聖十九年辛卯明の萬曆十九年此年春僧玄蘇
柳川調信をして通信使を護還せしむ

按二懲必録二辛卯春通信使黃允吉金誠一回
自二日本倭人卒調信玄蘇偕來とあり又攷事
撮要二萬曆十九年辛卯黃允吉等回自二日本
秀吉又遣二玄蘇等致書本國辭意極其悖慢声
言假道入犯天朝本國舉以大義斥絶其使即
具二咨文順二付賀節陪臣金應南報于禮部二續差二
陪臣韓應寅另具奏聞と見一たり
又按二隱峯野史別録二明年辛卯黃允吉等與二
倭使玄蘇卒義智卒調信等偕來玄蘇義智由二

鳥嶺調信由二竹嶺分二路入京允吉箴及上下
大小人皆以為賊必大舉獨誠一謂賊萬無來
理云々と有り此の時公みづろが信使を護還
せらまといふ謬きり
此年豐臣秀吉終二朝鮮を伐たしむ公此二におい
て此年夏二つから釜山二至り懇に告るに豐臣路
を朝鮮二借り明國を伐たむとん若此をを報一速ク
に其の和を通せしむるにあらずむ朝鮮亡國の患た
らむといふをよつてせらまといふとん彼國答ふ事無ク

りし也

按懲必録此の事を記して辛卯夏平義智又
到釜山浦為邊將言日本欲通大明若朝鮮為
之奏聞則幸甚不然兩國將失和氣此乃大事
故來告邊將以聞時朝議方咎通信且怒其悖
慢不報義智泊船十餘日快々而去といひしハ
其の詞を裝飾してかく謂ふもの也

文祿元年壬辰四月明の萬曆九年朝鮮昭敬王廿五年
豐臣終に小西攝津守行長加藤主計頭清正以下

諸將をして往て朝鮮を伐たしめ公をして先鋒たらし
む此年主計頭清正攻て彼國會寧府入り臨海君順
和君の兩王子を擒にん

同二年癸巳明の萬曆十一年此年四月明國謝用梓徐
一貫沈惟敬をして我國名護屋に來り豐臣に説き和好
の事を議せしむるに於て五月豐臣其擒にん處の兩
王子を朝鮮に徐一貫と同じく燕京に至り和事を議
せしむ公家臣早田四郎兵衛をして行長の臣小西飛騨
如安と同じく燕京に往りしむ此時 公書を朝鮮慶

尚道巡察使洪履祥_二送り而王子を還さ_レし_一の事_レ
つを_レ我州力を_レ用ひ_レら_レざ_レる_一の趣仰_レあり_レ也其
書の略に_レ出還王子_一非清正之功乃自己_レ所致力清
正自_レ此視如_レ仇讐相激日甚今聞朝鮮與清正信
使絡繹_一不通使_レ於我輩_一何也又_レ一_レらく大明許
和不可_レ必若朝鮮許_レ之則當_レ悉衆渡海願_レ獻各陣
遺糧_一以賑饑民_一と有り_一也一_レ洪履祥を_レて書を復せ
しめたり此の時往復の書の事西崖集に見_レへ_レあり

答平義智書

得_レ来書辭意縷々知_レ足下有_レ悔禍尋_レ薦之意甚善
甚善既往之事言之無益然其中有_レ一二宜復者
不得_レ遂已我國與_レ日本交好如_レ兄弟講信修睦無_レ
纖毫間隙今_二百餘年_一至於對馬島則稱為東藩
臣附我國故國家待之尤厚舡粟以哺_レ之輦布以
衣_レ之舉_一一島之民自_レ乃祖乃父無_レ不被_レ涵濡_一卯育
以得_レ生活_一秋毫皆國家之恩足_レ下年幼或_レ未聞知
詢_レ之黃髮則可知也嗚呼虫蛇微物猶知報_レ恩人
而未_レ知_レ恩惠_一以怨報_レ德則真虫蛇之不_レ若也然豈

一島之人盡皆為此耶其陰懷禍心造起兵端者
必有其人而兩國生靈肝腦塗地以千萬計斯人
者實天地鬼神所不容明無人誅必有陰誅聖人
云天道不僭福善福淫又曰人眾則勝天々定亦
能勝人一時強弱不足論也書中所言先以禍端
相告者皆是我國家忠以事上信以交隣過於推
誠不誠詐諛以至於此受禍雖深於義無愧尚何
言乎王子無恙清心自以為功今聞事出足下若
果然則舊義猶未盡絕而亦天實誘眾以緩其禍

惟此一事足感人心嘆尚嘆尚大明天覆地載兼
愛南北之民不欲窮極兵力以戕_中生靈_上初許貴國
納款沈遊擊往來非一封貢之許已有聖旨不日
可成而不意中間派布之言以為日本實無疑附
之意其所望亦不止於封貢而前日犯順之計猶
未已也此言非出於大明之人亦非出於朝鮮之
人也實出於足下同事人之口日益傳播疑亂其
間繼以有安康搶掠之事_按兩朝平壤錄萬曆二
_三倭見_二小西飛_不回清_正復發_兵搶_二安康_此時苗
兵一千在_二慶州_一聞之往救被_二倭誘_入險地_伏起殺

我兵三百餘以實其言以此皇朝深加恠責雖沈
人謂此也遊擊周旋致力於其間而朝廷亦不甚信事機參
差至今未決尚誰咎我此事足下久必自知今不
須云々夫以春秋小國猶以城下之盟為耻况於下
堂々天朝臣妾萬國八表承風物無違拒貴國恭
順不篤而欲以悖慢要之是猶以其入而閉中之門
也此在足下深思善處之如何耳國家於足下釁
隙雖深而九所處分悉從天朝而命僅足下翻然
改圖知止戈之為武戒不戢之自焚於天朝則極

致恭謹之節於本國則變其及噬之心庶幾天道
助順人謀與能東隅之逝雖不可追而桑榆之失
補之未晚謹此奉復餘不具悉

和文

來書を得て足下禍を悔ひ舊好を思ふの意有るを承り
已往の事今此をいひて益ふといへといへ我國日本
好むを交々事既小兄弟の如くにして對馬島に至りては
其東藩と稱し我國に臣として附てのやを以て國家
此を待つる尤厚し一島の民其祖先よりして生活

の患を受るもの何れ我り國家の至恩に有らざるは
是下年幼くして此を聞く事なくと其舊老も問
ひ知るべきもの然るに今其恩を忘る怨を以て徳報
や但其禍心を懐き兵端を起し其一島の人を擧て
盡く然るに何れ此を必死其人有ると思ふに此の人
必に天地鬼神の其責をゆるさざるべき處のよし也九表善福
淫に禍を天道の常ある時一時の勝敗をいふに
足らざるもの有り書中のいふ處其曾て禍端を以て相
告たりしとふよし

按三年卯年 公三つから釜山に至り豊臣兵を
起し此由を告ぐまじりと彼國各一さりし事

仰有りしと
見へたり 我り誠を推し隣國に交るを以て其詐りを慮るに
及ばば以て此に互まり禍を受る事深と一と止義において
愧つべきものあり王子の恙なき清正以ておれせり功と
て今言ふ處を聞時此事實は是下我國の為に心を用る
まり出たりとむし其いふ處の如くむし舊義尚未々盡く
絶絶せたとして又實に天道ありて其心を誘き以ておに
至らしむる也但此の事人心を感せしむるに是る此
大明南北の民を兼愛して兵威を窮め生靈を害
せむ事を欲せしよつて沈遊撃をして来往せしむ封

貢の事

按此時小西行長沈惟敬と計りて豊臣を日本國王に封して又貢を中國に進むの事を許さば兵を退けむと偽りせういひし也

おもふに久しからずして成る一然も中間配布の言ニ日本實に忠順の意無く其望處又封貢に止まらば終に中國を犯すの計有りと此を實に足下事を同くする人の言より出て其後果して安康の變有るを以て大明甚だ是を疑へりも一貴國其恭順の誠を盡さる此事成らざるの理あらむや且足下天朝において極て其恭謹を致し我國におめて其及び噬ふの心を變化する事有らる尚其禍を悔るの報を得る事有

らむ非難の言の自り所也

「按此書に然も中間配布の言ニ日本實に忠順の意ある其望む處又封貢に止らばつひに中國を犯すの計有と是實に足下事を同くする人の言より出て其果して安康の變有りといへるを加藤清正を指してかくいひしものあり蓋し此時専ら和議を主とししを小西行長也其虚偽を構へて豊臣を賺し以て姑く危難の患を免むと計るを惡むて必らば其和を敗らむと為らむしハ

清正也其勇悍にして善く闘ひ精忠にして二心
あかりりも又清正也是彼國の以て害有りと在る
清正よ志く老有らば是れ清正を除きさる時を
媾和の事成りかたきを以て今かくの如くいひて必
らば和議を敗らむと在るは是清正也と我に知ら
しめて是をして除き去らしめむと計りし也以て反
間を行はむといたせしよ也

又按此時公書を洪履祥にいたして出還王
子非清正之功乃自己所致力云々と有りしかハ

彼を書を復して王子無恙清正自以為功今聞
事出足下云々又惟此一事は感人心といひし
事は皆姑く其一時相贈答在るの詞にして今祥に
しかたきその也大抵小西行長平壤の敗き有り
しよりして頗る畏縮の念有り又清正の功を敗るに
心有りしを以て沈惟敬と示し合せ計を設けて
豊臣を賺したりしに豊臣又此比朝鮮の終に
攻取しかたきを慮らむしゆ一小西りかく取り扱ひ
しを便宜として其事を察せざるもの、如くして

此時兩王子を出し還し漸く他日和を構ふるの張本
を計らきしあるべし若し然るにあらざらばめを明
使爾書を賁し来て封爾日本國王と有りしに至り
て小西の迹形も無く偽を構て豊臣を賺したりし
事明らか露顯したり此時いつて小西をぬして
戮せらるるも但先長老と其秘を覺らさ
りしゆ一かの壘書を讀ましめられしの時小西り付
囑せし如く讀をして分明し封爾日本國王と
讀し又朝鮮兩王子をとり来て謝せしむるの事

おかりし其勢おのつから止むかたして再諸將を朝
鮮に渡させしその也俗の傳ふるに此時朝鮮攻の事
人ごとかく落著あきの事ありと覺えたり甲辰に
柳川調信等豫しめ我州後來の事を憂ひて
計畧して兩王子を還さしめずりて他日好在
通在るの設とふせしありとおまふに豊臣の智
を以て行長り惟敬と示し合て王子を還され
ハ朝鮮四道を獻して又豊臣を以て大明國
王の姫を爲しまいらせむふと依りしとてた

也在く賺されて由ふく兩王子を出し還さるべきにあら
ば又調信等り計畧してすへき無の況也我
人彼國の人に對して以前此事我州朝鮮のため
心を盡されたりふといひて彼より感激を得むと
計此き彼の義理に有つて當らざるを識らざるの
之にあらば又いふ刀る人情時勢の果して如何と
いふに昧らきもの也如此の物語して彼の國人に
嘲らる事ある也

慶長三年戊戌八月豊臣秀吉薨を遺命して

諸將をして引き歸らしむ爰におひて諸將始て
兵を捲き國に歸き此間兵禍前後七年を連
て兩國通好の事終に絶へたり

朝鮮通文大記卷之三

朝鮮通文大記卷之三
丁未國書院刊
朝鮮通文大記卷之三
丁未國書院刊

